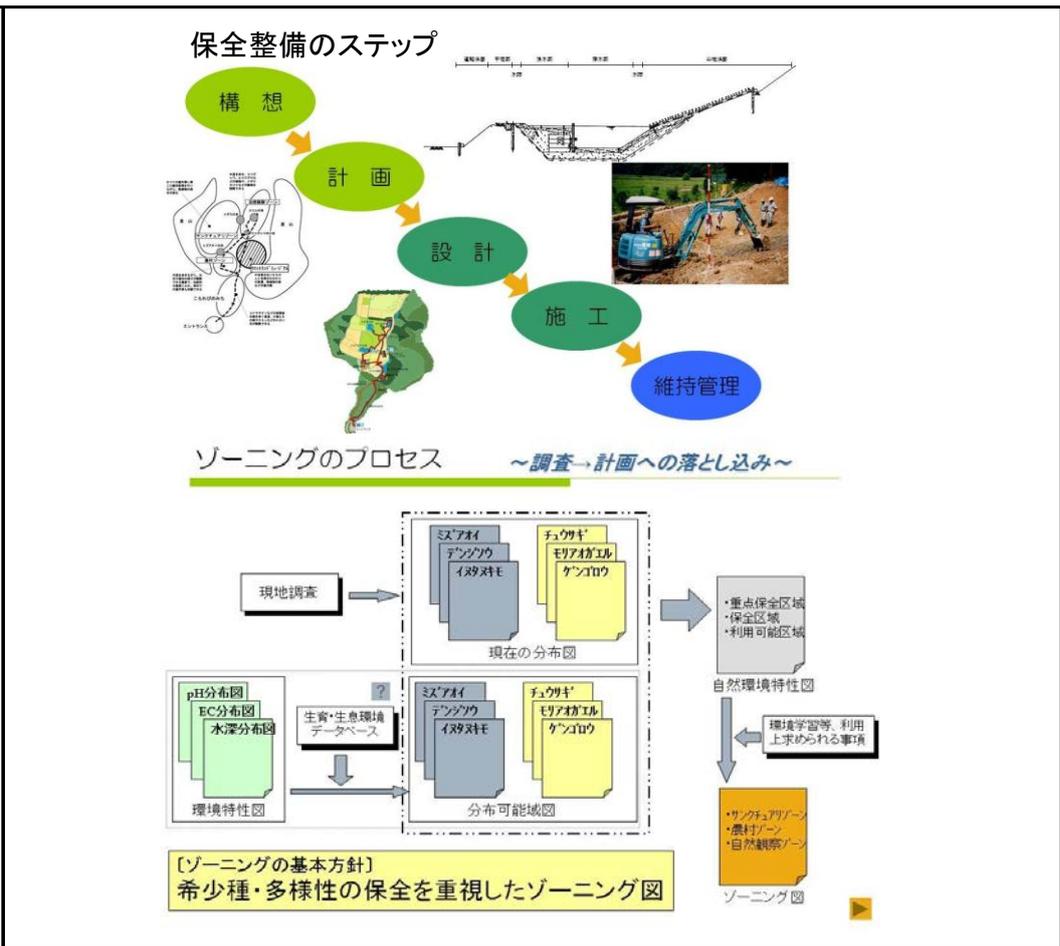


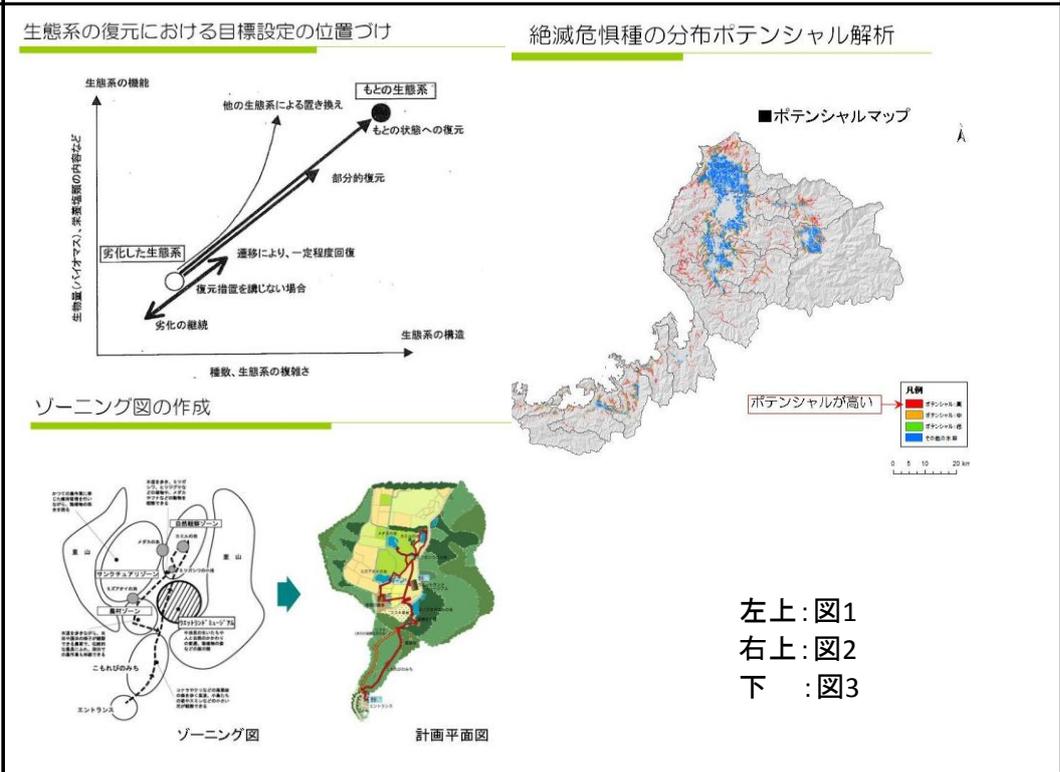
里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	計画策定と実行プロセス
手法名	生物多様性保全のための生態系モニタリング調査の手法と活用
主体	株式会社環境アセスメントセンター
背景(地域の課題)	<p>多様な主体が関わる生態系保全整備計画づくりにおいては、初動段階からビオトープやエコトーンなどの具体的な整備空間の議論を共有することは難しい。そこで、構想から施工維持、管理までのプロセスをきちんと設定し取り組むことが求められる。またプロセスを踏むためには取り組み目的を明確化するための対象生物の設定や、そのための調査とデータの活用手法が必要となる。</p>
手法／方策の詳細	<p>福井県敦賀市中池見では、水田雑草の再生を中心とした生態系保全活動が行われている。そこでは、保全目標やゾーニングの設定などにかかわる他へも波及可能な効果的モニタリング及びデータ活用の手法が実施されている。</p> <p>(1)生態系保全の取り組みステップ 生態系保全整備事業においては、大きな方向性を検討しながら、①構想、②計画、③設計、④施工、⑤維持管理といったステップを踏みながら取り組む。</p> <p>(2)調査手法とデータの活用方法 ①目標と整備方針の設定(図1) 保全整備活動において最も重要な項目が目標設定。劣化した生態系を完全に元に戻すのか、部分的に復元するのか、あるいは異なる他の生態系におきかえることで豊かにするのかなど、複数のシナリオを検討し共有していくことが重要。またかつての保全地域の土地利用などの履歴・背景なども確認し参考にする。 上記を踏まえて、保全地域において何を保全していくのかを設定し、対象種に対応した整備方針を設定していく。 ②ゾーニング(図2) 整備計画に向けた平面図を得るためには、ゾーニングが必要。現地調査を行いどこにどのような生き物がいくのかを全部プロットするとともに、今はなくても状況を整えることで生息・生育が可能である「分布可能域図」も作成し、保全整備作りに活かす。 ③維持管理方法の検討 ゾーニング場所での管理方法を検討するため、地域の方々にヒアリングを行うなどする。</p> <p>(3)保全エリアの特性を活かした生態系保全手法(水田を中心にして) ①シードバンクとしての耕作放棄地や現行水田 耕作放棄地や現行水田にはシードバンク機能があることが考えられ、環境を整えることで、残存している種が発芽するなど生物多様性を高めていける可能性がある。 ②ポテンシャルマップの作製と利用(図3) 水田雑草は、土壌水分が高いところで希少な植物や種子が多いということが分かっており、田んぼの乾湿を調査することで、希少な植物が残っているかどうかを推定することができる。こうした条件を地図に落とし込みGIS等の活用を図ることでより広域的に保全策を講じる地域設定の前提を設けることが可能である。 ③種によって異なる生育条件と水深等への着目 わずか水深10cm内の範囲でも植生が異なり、また水中の空気量によって発芽の仕方が変</p>
手法・技術的視点	<p>(1)計画策定から維持管理までの具体的なプロセスを提示 多様な主体の参加と協働による活動において課題となりがちな合意形成を、具体的な調査、モニタリング、マッピング手法等を用いて促進していく技術的指針を提示していることが着目される。</p> <p>(2)調査データの効果的な活用・運用策を提示 従来の動植物調査では、生息状況の現状把握を行うことが主流となっている。本事例では調査を踏まえながら、将来的に生息が可能なエリアを科学的に推定することを提案しており、生態系保全再生の具体的な指針作りに有効だと考えられる。</p>

実行プロセス・運営体制のイメージ



図・写真資料



参考資料

里なび研修会in神奈川県パワーポイント資料(関岡裕明氏)